

不登校の取組について

【足立区立 A 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、昨年度から不登校になった。最近になり、欠席日数が増えていることが気になり始めた。

具体的な取組

・別室対応できる部屋の準備・提供 (相談室を3部屋準備)。

常時最低1名の教員が常駐できるように、不登校加配教員が分担表を作成。不登校生徒の話し相手、不登校生徒の指導、自習の補助、リモート授業、スクールカウンセラーがいる日はカウンセリング等を行っている。学校内で教職員や他の生徒との関わりを持てる場を提供している。



・家庭との連携

担任を中心に、不登校加配教員が加わり家庭との連絡(原則毎日)を取っている。年度途中からアプリを活用したやりとりを追加した。

・別室でリモートでの授業参加

希望者には別室で自クラスの各教科や、学活、道徳の授業をリモートで受けられるようにしている。タブレットの準備や、担当教員への連絡を不登校加配教員が行っている。授業への参加だけではなく、クラスメイトとの交流もあり、他者と関わられる学びの場の提供にもなっている。



・SCやSSWとの連携

週1回、支援会議(SC、SSW出席)を開き、不登校生徒の情報の共有と今後の対応の検討している。

不登校生徒の状況によっては、不登校加配教員とSC、SSWの3人で家庭訪問を行っている。

成果

- ・不登校生徒1名が1ヶ月の別室登校を経て教室復帰することができた。
- ・欠席の日は毎回保護者・本人と連絡が取れる状態を継続させている。

課題

- ・ICTを活用した対応を苦手とする教員がおり、リモートでの授業見学等ICTの利用が困難な場合がある。

「別室指導の取組」について

【足立区立 B 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は複数名いるが、いずれも外部諸機関を利用したり S C、S S W と相談後、教室に復帰したりすることを目指し、生活・学習のリズムを取り戻すために、登校サポーターや教員と午前中に学習や作業を行い、給食後下校している。

具体的な取組

◆別室の準備

・本校では、不登校生徒の居場所づくりとして、S C との相談や外部機関等を利用することがある。また、教室にはまだ戻れないが、学校内で学習を希望する生徒には、より学校生活に近づくために、別教室を用意している。しかし、現在は余剰教室が少ないため、教育相談室を S C と併用している。

教室内は学習できるスペースとくつろげるスペースに分かれている。



◆活動内容

・登校サポーターと、別室で午前中は自分の課題や提供された教材に取り組んだり、担任や S C と面談をしたり、個に応じた対応をしている。時には文化祭前の取組で掲示物の準備を教員と一緒に作業したり、教科の学習をタブレットで復習したりすることもある。

・学習後には、登校サポーターと給食を食べてから下校する。



◆S C、S S W、外部機関との連携

・本校では、区の S C、都の S C の 2 名体制で相談が行われている。不登校生のうち、約 30 名の生徒や保護者が S C と面談を行い、別室指導や外部機関を紹介し、教室復帰へつないでいる。

◆別室の整備と運営

・教育相談コーディネーターを担当する教員が、S C と生徒、保護者の面談や別室指導の時間割を作成し部屋の整備を行っている。また、外部機関との連携も行っている。



成果

担任や登校サポーターが家庭と連携を取り、生徒が取り組みやすい課題を提供して、学習支援を行っている。教室復帰を目指している生徒が、家庭でも生活のリズムを整え、教室復帰に向かう生徒も徐々に増えてきている。

課題

別室指導から教室復帰までが未だ困難である。今後は今まで以上に、教室につながる機会を増やしていきたい。

不登校継続生徒の登校支援に向けて

【足立区立 C 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、小学校高学年時より欠席日数の多く、中学校に入ってから登校に向けた改善が図れずに、現在中学3年生になった。中学校段階で本校別室の開室や別室への登校、SCと週一面談、登校サポーターとの連携にて登校日数が増えた。

具体的な取組

別室での支援指導の充実

本校では令和2年の中期より別室を正式に開設。教員ではないサポーターによる支援を行っている。生徒の望む曜日や時間に登校し、自学やサポーターからの支援、必要に応じてSCとの面談を実施。生徒の気持ちにある、登校への高いハードルを下げた。



別室にはサポーターが待機し、生徒が登校できそうな時間に迎える。また、生徒の自学を見守り、時には相談を受ける環境を設けている。

SCやSSWなどを含めた支援体制

不安や悩みの原因や理由を複数にて確認を行い、そのうえで、生徒本人や家庭に向けた支援や助言を行っている。必要に応じてSSWと担任が家庭訪問をして話をするなど、安心感のある対応を行う。

登校サポーターによる朝のお迎え

生活リズムを保ち自ら決めた曜日や時間に登校をするために、登校サポーター制度を利用し登校の支援を行っている。不登校生徒や登校を渋る生徒にとって、一人ではなくサポーターと登校することで安心して一日をスタートしている。

時間、場所を問わない登校スタイル

登校が困難な生徒にとって、周囲の生徒と異なる生活リズムであるため、生徒によっては夕方に登校して担任などと話をする形式や、地域のNPO法人が運営している居場所への参加も出席扱いにするなど、通いやすい場所に登校できるようにしている。

成果

登校場所は学校の教室だけではなく別室などに登校できるスタイルが全員に浸透し、不登校生徒は年間授業日数の5~35%程度出席できるようになった。学校内外問わず複数体制にて不登校生徒の支援を行えるようになってきている。

課題

別室利用を望む生徒の増加や、不登校生徒に共通事情や理由はないことから、個別の対応策の検討に時間を要している。

校内別室の活用について

【足立区立 D 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、3年生、令和3年度は124日欠席であった。しかし担任、不登校対応加配教員、学年教員、SC、養護教諭、登校サポーター等が、本人への粘り強い支援を続け、本人の受験への意識の高まりが、心を後押しするようになり、令和4年度には、毎日、別室に登校し、自習をすることができるようになった。

具体的な取組

- ①階段を上がってすぐの2分の1教室（SC室隣）をきれいなパーテーションカーテンで8つに区切り、生徒机を置いて個別学習できるブースを作り、左サイドに大きめの机を置き、休憩時に談話できるスペースのある居場所（校内別室）を設置した。
- ②校内別室に登校をする生徒は、登校時に職員室に顔を出し、不登校対応加配教員や空き時間の教員や区内の登校サポーター（週3日）、SC（週2日）が対応している。
- ③区から配置されたタブレットでオンライン学習を行える。



成果

- ①不登校対応加配教員は、支援会議で、別室での対応生徒の支援の在り方の検討を議題にし、また、教室復帰への支援体制の在り方を話し合い、学習教材の提供を呼びかけ、自ら指導実践を行ってきている。
- ②学級の生徒と休み時間や、給食時に交流できた。
- ③個別学習にじっくり取り組む生徒が増えた。

課題

担任、SCの関わりを続けながらも、別室登校まで至らない生徒・別室へはまれに登校できる生徒に、より登校する喜び、楽しさを体感できるようにする。

生徒のニーズに応じた校内外で連携した支援

【足立区立 E 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、中学 1 年時に友人関係のトラブルから教室への拒否感が強くなり、登校渋りが続き、徐々に学校に来られなくなった。担任が保護者とこまめに連絡を取り、当該生徒の別室利用が始まった。別室利用を続ける中で、登校状態が落ち着き、別室を開室できない日はあすテップ等校外学級への通級を始めた。そのような関わりの中で、チャレンジ校への進学を決め、進路実現に向けて努力することができている。

具体的な取組

(1) 安心できる居場所としての別室支援

登校渋りの生徒や、集団での学習や教室に入ることが難しい生徒の居場所及びステップアップの場所として、別室を開室している。

登校しやすいよう 1 階の相談室、保健室近くに別室を設け、不登校加配教員を中心に複数の生徒を支援できるようにしている。別室では、タブレット端末で学習したり、他の利用生徒と交流したりするなど、学校への拒否感を徐々に軽減させている。給食時には、教員とコミュニケーションをとる時間を設け、個々の生徒が抱える困り感を把握し、安心できる場所となるよう、情報を共有し、支援している。



(2) 校内の組織連携

週 1 回の生活指導部会、月 1 回の S C や S S W も参加する特別支援教育推進委員会等で各学年の不登校生徒の状況を共有し、支援方法を検討する。また、各学年に教育相談担当を置き、S C との調整をするなどの組織的な支援をする。

(3) 関係機関との連携

月 1 回不登校状況調査を提出し、関係機関と情報共有している。また、担任と関係機関がこまめに連絡を取り、教育相談や通級を利用している生徒の情報を共有する。必要に応じて S S W とも連携して対応する。

(4) WEBQU の活用

年 2 回 WEBQU を実施し、生徒のアンケートから学校生活における満足度と意欲、さらに学級集団の状態を把握する。結果を学年で共有し、生徒が安心して登校できる学校・学級づくりに役立てる。

成果

対象生徒は、以前は学習に消極的だったが、今は学習にも積極的に取り組んでいる。別室、教育相談、通級などで様々な人との関わりを通して自分を成長させ、進路実現に向け、努力できるようになったことは大きな成果である。

課題

対象生徒は、3 年時の年度当初は教室復帰を目指していたが、継続して教室へ登校することはできなかった。生徒のニーズに応じて支援ができるようにさらに支援体制を検討し、整備することが必要である。

不登校に対する加配教員の取り組みについて

【足立区立 F 中学校の取組】

不登校生徒の状況

対象生徒は、昨年度教室に登校できていたが本年度から不登校となった。他生徒、特に同学年の異性と会うことに恐怖感があり、年度当初は保護者と一緒でなければ登校できない状態であった。現在は一人で登校サポート教室に登校できている。

具体的な取組

●不登校生徒の居場所づくり

登校サポート教室(TSルーム)を運営し、不登校生徒が校内でも安心して過ごせる居場所づくりを推進している。登校サポーターと連携し、TSルームのきまりや過ごし方などを設定するなど不登校生徒への指導をしたり、話し相手になったり自習の補助をしたりしている。学校内で他の不登校生徒や教職員などの他者と関われる学びの場を提供している。



●SCやSSWとの連携

加配教員が、SCのカウンセリング予定表等を管理し、不登校生徒の希望に合わせて面談をコーディネートしている。また、SSWと家庭等に課題のある不登校生徒について情報交換し、食事支援など様々な支援について依頼をしている。

●不登校生徒の情報収集について

電話連絡による情報や、担任・教育相談コーディネーター・登校支援サポーターが得られた情報、外部機関が得られた情報を収集している。特に登校支援サポーターは登校サポート教室において長い時間不登校生徒といっしょに過ごすため、教室で何をしていたか、どのような様子だったかなど、加配教員がサポーターから詳しく聞き取っている。

●校内研修の企画・運営等

QUテストの結果を受け、不登校の可能性が高い生徒を結果表から見つける方法やそこから表出する課題とその解決について、全教員を対象に校内研修を実施している。また、加配教員が不登校対策関係の研修会に出席し、校内研修会の中で還元研修を行い、新しい取り組みの周知や新しい情報を全教職員と共有している。

成果

令和2年度には6.47%であった不登校出現率を、令和4年度には2.81%に減らすことができています。加配教員が、担任等各所と連携をとりながら、登校サポート教室を運営し、学校復帰(別室への登校や教室復帰)へ繋げている。

課題

学校復帰率は令和4年度に14.29%に留まっている。不登校になってしまったときに、教室へ復帰できるようにすることが課題である。

不登校生徒の学校復帰を目指す支援について

【足立区立 G 中学校の取組】

不登校生徒の状況

不登校の生徒は、全校で 22 人（9 月末現在で 15 日以上欠席）いる。
そのうち、登校する または できるようになった生徒数は、13 人である。
学校復帰ができるような支援を全校体制で取り組んでいる。

具体的な取組

いじめアンケートについて

- ・年 3 回のいじめアンケートを実施し、アンケートの集計及び聞き取りを行う。

また、生徒会によるいじめアンケートの実施及び生徒会役員による相談を年 1 回行っている。

ボランティア活動について

- ・学年を超えたボランティア活動を計画し、上下関係のトラブルが起こりにくい環境づくりを

全校体制で行う。



支援方法について

- ・担任より定期的に電話連絡をする。
 - ・保護者、本人との面談を実施する。
 - ・登校意欲を促す。
- （「生徒支援シート」の記入など）
- ・外部の支援機関等の案内を行う。

スクールカウンセラーについて

- ・区 S C は、毎週火曜日に来校
- ・都 S C は、毎週木曜日に来校

※面談を希望する場合、可能な限り都合の良い時間に設定している。

ア：生徒と保護者 イ：保護者
ウ：生徒 様々な形式で相談可能としている。

成果

- ・ほとんどの生徒が、何らかの形で担任と話をすることが出来る関係を作ることができた。
- ・関係諸機関とつなげることができた。
- ・二者面談を行い、生徒一人一人の状況を把握することができた。
- ・個に応じた別室運営が行われ、教室登校の足がかりとなった。
- ・区が施策する「北部の居場所」（家庭での学習が困難な生徒を対象とする、学習の場所と安心して過ごせる居場所）を見学、通所できるようになった。

課題

- ・不登校生徒に対して、登校の意欲や意識を高めるため、放課後に登校、オンラインで面談、電話連絡、家庭訪問など、連絡がとりやすい方法でアプローチするが、連絡がスムーズに取れないケースがある。